

「安心と不断の努力が礎の“自己責任社会”に学ぶ」

小野洋子（自由が丘産能短期大学能率科 准教授大学教員）

今日はとても楽しみしていたデンマークの講義、胸を躍らせて席についた。

銭本先生の元気ハツラツ・ファイトー発的な講義は、90分間ずっとワクワク感でいっぱいだった。

まず、私がデンマークに関心を寄せたきっかけを説明すると、それはゆきさんの「寝たきり老人のいる国いない国」との出会いだ。当時は、認知症が出始めた母との悩み多き生活の真っ只中におり、授業で「寝たきり老人は、寝かせきりにされた被害者」と聞いた時の衝撃は言葉では言い表せない。

往年の面影が無くなっていく母が不憫で、心配のあまり母の自立や尊厳を奪っていた（に違いない）のだが、渦中にいる時はどんな言動が元凶になるかを学ぶ余裕がなかった。

互いのストレスを募らせることも多く、両親を看取って3年を経た今も「寝たきり老人」がいない国の実情と極意を知りたいと願い、今月、なかば、デンマークを訪ねて夢をかなえることにしている。

その予習もかねての受講であり、放課後まで参加させていただいた。

銭本先生から大変多くの学びを得たのだが、このレポートでは、自立・自己決定に絞って感想を述べてみる。

どうしたら「自立」が当たり前の国民になれるのだろうか？

銭本先生はそれまで私が気にもとめていなかった歴史から話を起こしていった。

公共サービスの話に進むと、自分の仕事から、教育制度について大きな関心を寄せた。

大学まで授業料無償ということは知っていたが、さらに「学生手当」があり、成人（18歳）したら社会が責任を持つと聞き、“なるほど”と大きく唸った。

また、学校は実力をつける場であり、高校進学率は6割という点も日本人の感覚とは異なる。

学歴を求めるのだけの通学はムダ、学生自身も社会もそれを望まないとの説明に、目から鱗の“なるほど”をもう1票。

主体性の意識を幼い頃から育てている国では、じゃんけんで順番を決めることはない。

私は授業で「じゃんけん禁止」という手法をよく用いるが、わざわざ禁止しないとならないところがデンマークと大違いである。

悪平等に浸りすぎないようにしたいものだ。

放課後で銭本先生に公開講義の感想を伺うと、質問を投げかけたときに「返事がないのが淋しかった」とのこと。

答えに自信がないと視線をそらしてしまうのは、正解を求める教育の弊害だろうか、それとも今はやりの忖度の表れか。

いずれにしても、これでは、世界では通用しない。

昨今、何かと学校の責任問題追求や役人バッシングが見受けられるが、国民みなが真の自立を目指して、外野の出番や過保護を控えることが必要との考えを強固にした。

障害者支援においても自己決定が当たり前で、自分の身辺ケアを託すヘルパーは、自身で募集して選ぶという。

ブラボー！　なんて素敵な感性だろう。

“なるほど・なるほど”と感動した。

デンマークではきっと干渉し過ぎない“いい距離”を保ちながら信頼関係を築いているに違いない。早くかの地に赴き現場の風を肌で感じ取りたいとの期待が膨らんだ。

麻薬に関する自己責任も日本と異なる。

使用を取り締まる罰則はなく、法で禁じられているのは売買についてだ。

これは“なるほど”を超えてびっくりであった。

私達は悪事と定めたことに対して目くじらをたて法規制しようとするが、規則があれば破りたくなるのが人間のサガ、そんな心情をよく知っている国は大人のルールが成り立つのだと感心した。

医療と福祉の連携における自己決定については、放課後で追加説明をしていただいた。資料の「国民一人一人にソーシャルワーカー」のくだりである。

予測不能な全ての事態に備えることはできないのはデンマークでも同じ。とはいえ、老化や病気が進行したら、自分がどのようなケア・人生を送りたいかの話を聞いてくれるソーシャルワーカーがつき、ケアの調達をはじめ様々なサポートをしてくれるようだ。

先を見越すことができる専門家の支援を受けて自己選択できることは、この上ない安心に違いない。

私もデンマークの人と同様に、QOLを下げるような医療は受けたくないとの想いが強い。

本人の自己決定を尊重した病気との共生がかなえられる鍵は、患者と対等な関係にある医師の存在に加え、このソーシャルワーカーの活躍にあるとみた。

デンマークに学び、日本でも当たり前に行うことができるようになることを目指し、自分ができることを考えてみようと思う。

錢本先生の締めくくりの言葉は「不断の努力」。

世の中には完璧なものは存在しない。

だからこそ、住みやすい国作りのために、変えることを厭わず、常にトンテンカンテンすることが大切である。

“なるほど”が満載の講義をありがとうございました。